

大阪の 社会福祉

2020.2

777

The social welfare
in OSAKA



社会福祉 大阪市社会福祉協議会

<http://www.osaka-sishakyo.jp>

- 居場所いろいろ おやしカフェ(大正区)
きどらないうけど、驚いたカフェ
〜一杯にまごころを込めて〜
- シカゴの社会福祉 視察研修参加者レポート②
平野区 地域福祉活動報告会 にこにこ交流ライブinひらの
〜みんなで話そう〜まちのミライ〜
- 天王寺区 つながらるランドへいらつしやい！
〜互いに見守りささえあうまちづくり〜
- 西成区 支えあう地域づくりを目指して
見守りネット倶楽部シンポジウム
〜支えられ上手、支え上手な人があふれる西淀川区を目指して〜
- 西淀川区 2019年発達講座 支援の原点と意味 理解的アプローチ
〜自尊感情・自己肯定感に焦点をあてて〜
- こんなことやっています！私たちの施設から、
社会福祉法人 天宗社会福祉事業会 天宗東住吉園
子育て支援に力を入れ、地域に愛される保育園に――
- 8 7 6 5 5 4 3 2

市社協

本会初の「法人発表会」開催

市社協は令和元年12月24日、たかつガーデンにて「法人発表会」を開催。大阪市社協・区社協の事業改善や市民サービスの向上を図るため、今年度から創設した「職員提案制度」に基づき、提案・実践報告をおこなった。

市社協・区社協職員、区社協会長など、119名が出席。高齢者・障がい者の居場所づくりや潜在化した当事者を支える福祉活動など、多様な取組みを共有した。

(2・3面に続く)



審査委員のみなさんと発表した市社協・区社協職員全員で記念撮影

HB

二〇二〇東京オリンピック・パラリンピックがあと半年後に迫ってきた。その

パラリンピックに聴覚障がい者が入っていないことをご存じでしたか▼この事例でもわかるように、パラリンピックはまだまだ認知度が低いのが現状だ。また、ここ近年のパラリンピックでは、日本人のメダルがほとんどないということも最近知った。欧米や中国が国を挙げて選手強化に乗り出して、個人任せの日本ではとても太刀打ちできなくなってきた▼ところが、今回は少し違う。オリンピック選手育成のシステムやトレーニングセンターが、そのままパラリンピックの選手も使えるようになった。もちろん周回遅れの選手強化だから、すぐに結果が出ることは期待できないが▼走り幅跳びのマルクス・レーム選手のように、義足でもオリンピック選手と対等に争える記録を出す選手も現れている。「オリパラ」と一言で言われるように、オリの選手もパラの選手も対等にアスリートとして育成するようになったのは、共生社会への大きな一歩▼障がい者と健常者に差別のない雰囲気、東京オリパラをきっかけに生まれつつあることを喜ぶたい。(石)

(1面より続き)

当事者の居場所づくり・組織化を推進

発表会ではエントリーされた8件について、スライドを用いて、発表・質疑応答を実施。審査の結果、最優秀賞・優秀賞が選ばれた。

最優秀賞は、東成区社協 只石由実さんの「障がい者が気軽に集まれる居場所づくりについて」の提案である。精神障がいがあり、他者との交流が苦手な人などは、地域の居場所に参加しにくいことがあるという課題



只石さん(東成区社協)

への気づきから、当事者が気軽に集まれる居場所を、当事者自身で創り上げる取組みを提案。実現に向けて同じ思いを持つ支援者との打合せや、資金・場所についての検討を始めていると発表した。

優秀賞の一つ目は、平野区社協 角田達哉さん、仲谷昇太さん、井上佳奈さん、尾方俊祐さんの「The 男組 輝くプラチナ世代の道標 実践報告」。同社協では、定年退職後の男性が、地域を超えてつながり、いきいきと輝くことを目的として「The 男組」を結成。うどんづくりや多世代交流など、「やってみたいこと」を語り、楽しみながら地域社会に貢献する活動を展開している。

もう一つの優秀賞は、城東区社協 山田雅茂さんの「社協として潜在化した当事者を支える福祉活動の実践報告」。これまでの区社協の取組みは、こどもや障がい者への支援活動が不十分であると感じていた中で、わが子の不登校で悩んでいる親からの具体的な相談があった。こうした背景から、自身が配属された城東区・平野区で「不登校・ひきこもり親の会」「発達障がい者・当事者の会」を組織化。社協だからこそのできる、ニーズに基づく場づくりのプロセスを報告した。

居場所いろいろ

-17-

「いらっしやいませ」。コーヒーマスターの香り漂う店内は、清潔で明るく、活気にあふれている。背筋を伸ばしたマスターらが並んで一杯のコーヒーマスターに真心を注ぐ姿が爽やかだ。メニュー

は、皇室珈琲やバター焙煎珈琲など、こだわりの味が4種。夏はシェイカーで泡立てるアイスコーヒーマスター「神泡」も登場する。

「おやじカフェ」は、大正区ボランティア・市民活動センターで毎月第3土曜日に開催。活動メンバーは18名。マスターは15名で、裏方の女性スタッフは3名で活動されている。「喫茶ボランティア養成講座」でコーヒーマスターの淹れ方、接客のマナーを学び、カフェマスターとして活動。不定期だが、福祉施設や地域の集会所へも出向いている。

メンバーには、町会長もいれば、元会社経営者もいる。一人暮らしの人は「気持ちづが、初期メンバーのほとんどが活動を継続中。元トラックの運転手で、70歳の退職を



「注文は？」お一人おひとりエスコートします

おやじカフェ(OYAJI's CAFE)

- 主催：おやじカフェ
- 日時：毎月、第3土曜日、14時～16時
- 場所：大正区ボランティア・市民活動センター(大正区小林西1-14-3 ふれあい福祉センター2階)
- 対象：どなたでも
- 参加費：コーヒー(お菓子付) 100円
- 問合せ：大正区ボランティア・市民活動センター 06-6555-7575

きどらないけど、贅沢なカフェ

～一杯にまごころを込めて～

機に講座を受講した代表の別所義正さんは、活動の魅力をこう話す。

「同じ豆でも淹れる人によって味が違う。美味しく飲んでほしいから自宅で研究する人も。職人さんになったような喜びがある」。ドリップ式のコッポは、豆をふくらませ蒸らしたあと、コーヒーマスターの「土手」を崩さないように熱湯を注ぐこと。基礎は守るが、あとは自分流。それがまた楽しいようだ。接遇については「ボランティアなので、行き過ぎないように、自然な態度で接している」と話す。

「交代の時間です」のアナウンスでホールとバックヤードのメンバーが入れ替わる。体力やモチベーションに配慮されている。

コーヒーマスターを飲みに来た同世代の女性からは「おいしくて、ゆったりと過ごせて居心地がよい」との声も。「男子厨房に入らず」で育った「おやじ」たちが、一杯のコーヒーマスターを通じて、隠していたやさしさを地域に返してくれている。



代表の別所義正さん(左端)とマスターやスタッフ

提案・実践報告一覧

分類	氏名	提案・実践報告内容
新たな事業・取組みへの提案	東成区社協 只石	「障がい者が気軽に集まれる居場所づくり」について
現事業の発展・改善についての提案	市社協 桑原 (港区訪問調査員)	市社協・区社協の地域への認知を今まで以上に深めていく働きかけについて
	西区社協 山本	高齢者が集う新たな場の創造について
先進的・開拓的な実践報告	城東区社協 山田	社協として潜在化した当事者を支える福祉活動の実践報告
	市社協 田淵 北区社協 藤岡 中央区社協 竹越 中央区社協 中納 城東区社協 畑下 西成区社協 濱辺	「コミュニティ・オーガナイズ」を活用した自主勉強会の開催
	東成区社協 石川 島岡	生活支援体制整備事業協議体を当事者の参加により機能強化を図る
	天王寺区社協 大川 廣瀬 梶原 大川 西野 井上 大西	地域に根差した介護予防「いきいき広場」の実施
	平野区社協 角田 仲谷 井上 尾方	「The 男組」輝くプラチナ世代の道標 実践報告



山田さん(城東区社協) 左から角田さん、仲谷さん(平野区社協)

他区への波及をめざして

審査委員を務めた大阪市ボランティア・市民活動センターの上野谷加代子所長は講評の中で、「全体を通してプレゼンテーション力が高く、評価したい」と発表に臨んだ職員にエールを送った。

発表した職員のふりかえりとして、「今回報告したような取り組みが、他の区社協で新たに事業展開する際の参考となり、広がり生まれれば」といった声を超えて実践が波及することが期待される。

シカゴの 社会福祉

視察研修参加者レポート②



「人との繋がり 支え合う気持ちの大切さ」

社会福祉法人 聖家族の家 児童養護施設 聖家族の家 隈部 友子さん



母親交流スペースでの壁紙

だき、知らない事を学ぶ事が、自分の糧と周囲との繋がりを生み、何が出来るかを考える行動に移す事の大切さを強く感じた交流になりました。

HOUSE OF THE GOOD SHEPHERDは、1859年からDV被害を受けた母子のために、安心した環境提供、社会復帰を支援する歴史ある団体です。

カトリック系の建物であり、皆を導く羊飼いの名前が由来しています。住所は明記されておらず、病院や警察からの独自のルートで紹介されています。運営費等は、私的な寄付や企業からの寄付で賄われています。私たちの訪問中に、子どもたちへブーツの寄贈や、母親達へのスキンケアの指導にいられているボランティアの方がいらしていました。

プログラムは、3つのステップで構成されています。

ステップ1は、前に進むために、自分自身はDVを受けてきた、自分は悪くないという事を認識すること、ステップ2は、自分たち家族のために、仕事をみつかる、貯金の仕方学ぶこと、ステップ3は、自信を取り戻すために、退所後に入居者との交流、困っている事へのフォローアップです。ゴールは、親子がDVに戻らない状態になることです。マニュアルをベースに、個々にプランを作成します。DV環境にいた子どもに対しては、カウンセリングなどを提供し、子どもが子どもでいられる環境が大切だということにもフォーカスしています。

日本でもアメリカでも母親1人で経済的にも精神的にも独立をしていくためには、厳しい現状がありますが、変わらない、続いていくアプローチがあることが、母親の強さにつながっていくことになりました、とのことでした。ゴールを迎えるには、相当な苦難が想像できますが、そこには人との温かい繋がりが、支え合う気持ちの大切さを感じました。

シカゴプログラムに参加させていた

「こころ交流ライブinひらの」 ～みんなで話そう！まちのミライ～

平野区社協は12月21日、平野区民センターで、地域福祉活動報告会「こころ交流ライブinひらの」を開催した。こどもや高齢者の方々への活動をおこなう地域社会福祉協議会や介護事業所、ボランティアグループなどの実践報告がおこなわれ、区民を中心に約200人が参加。当日はクリスマス前ということで、主催者側のスタッフがサンタクロースの衣装で参加者を迎え、会場は明るい雰囲気包まれた。

工夫を重ねて根付いた こどもの居場所づくり

第一部では「善意銀行預託者表彰」がおこなわれ、善意の金銭や物品の預託をおこなった市民の方々が表彰された。

第二部では、この報告会のコーディネートで大阪成蹊短期大学の鈴木大介准教授が、サンタクロースの衣装で進行役を務め、会場内を楽しいムードに盛り上げた。活動に取り組む3つ



鈴木大介教授

り、屋外で遊ぶ機会が奪われつつあるこどもたちに安心して過ごせる居場所を確保しようという取り組み。善意銀行の助成金等を活用し、工作やお菓子作りなどの機会を設け、こども

のグループが順に登壇し、大型スクリーンに写真や動画を映し出しながら活動内容を具体的に説明した。

まず、加美社会福祉協議会が加美地域の「宿題をしよう会」について、続いて喜連北社会福祉協議会が喜連北地域の「子ども居場所」について、それぞれの活動内容をわかりやすく紹介した。いずれも、放課後や夏休み、冬休みといった期間に、少子化などの影響でこどもが減

たちが楽しく勉強し遊べる場所を、ボランティアと協力し合いながら提供する活動を展開している。活動を続けることで地域の方への理解が深まり、漫画などが300冊も寄附されるなど、次第に支援が充実し活性化していく経過も報告された。いずれも活動紹介の後に、参加したこどもたちがステージに登壇し、「楽しかった」「お菓子がおいしかった」などと感想を話す姿が印象的であった。



思いのこもった活動報告の一場面

「買い物に困っている人へ、 それぞれの思いと 強みを活かして支援」

続いて、「スマイルプラスと



報告会終了後に報告者と参加者みんなで集合写真

The 男組」が登場。重いものを持つたり、長い距離を歩けない高齢者などのための買い物支援をおこなう活動が紹介された。平野区周辺で訪問介護、デイサービスなどの事業に取り組む

介護事業所が、買い物支援を考案。野菜・果物の移動販売をおこなう店の協力を得て、月2回、近隣にスーパーなどがない地域にあるデイサービス施設の駐車場に「スマイル八百屋さん」を出店している。そこに、定年退職後の仲間づくりとして発足した「The 男組」が協力し、お客さんの荷物を運ぶ役割を果たしている。

鈴木准教授は「買い物支援という、制度の仕組みでサポートしきれない点をフォローできている。住民と介護事業所等が協力して、八百屋さんやそれに協力する元気な高齢者のボランティアグループなどつながりを広げて具現化し、助けあい・支えあいを実現していったことが素晴らしい」と話した。

「The 男組」のメンバーたちは、最後に自分たちが作詞・作曲をしたテーマソングを壇上で披露し、明るく楽しい雰囲気に会場を盛り上げた。

区社協の仲村千秋事務局長は、「社協職員は地域の生活課題の解決に向けて、住民の方々に寄り添いながら取り組んでいる。今回のイベントを通して、より住民の方々に寄り添いさまざまな声を聞き、何を伸ばせばいいのか、足りないのか等を住民の方々と話し合い、今後の取組みにも活かしたい」と話した。

天王寺区

つながるランドへいふつしやい！

～互いに見守りささえあうまちづくり～

ゆうあいフェスティバル

天王寺区社協は「ゆうあいフェスティバル」を11月30日に開催した。天王寺区在宅サービスセンターゆうあいの1階から4階まですべて開放。地域住民やボランティアに関わる方々のつながる場づくりと区社協をもっと知ってもらうことが目的だ。

まずは区社協の中野明男会長が、日頃の感謝を述べ、「このイベントを通してさまざまな人

と出会い、つながっていきましよう」と挨拶。これを皮切りに、各階でさまざまなイベントが始まった。

外のテントでは区内施設の飲食販売や地域ボランティアによる防災食カレーなど、楽しく食べる企画。

2階では、日頃から活動されているボランティアグループが、トーンチャイム演奏や手話ソング、マジックショーなどを披露。また「聴導犬つてなあに？」と題した特別講演会がおこなわれた。特定非営利活動法人MAMIE代表で聴覚障がい

オープニングにみんなでピース

の当事者でもある安藤美紀さんが聴導犬のいる生活について、クイズも交えながらわかりやすく紹介。また安藤さんの息子である手話シンガーの安藤一成さんによる手話歌で、参加者みんなの理解を深めた。聴導犬は普段触れることはタブーとされているので、交流のために訓練をうけたPR犬がいて、こどもたちと触れ合った。

3・4階では、認知症への理解を深めるためオレンジカフェやタオルを使ってエクササイズ、スタンプラリーなどを実

施。こどもから大人まで楽しみながら参加でき、いろいろな人が交流できる機会となった。参加者からは「普段接することのないたくさんの人と交流し、話げできた」との声も聞かれた。

区社協地域支援担当の西野泰

西成区

支えあう地域づくりを目指して

西成区つながり・支えあい推進フォーラム

西成区社協では12月7日、西成区つながり・支えあい推進フォーラム「支えあう地域づくりを目指して」を西成区役所とともに開催し、市民、民生委員、地域活動者等、区内・区外の合わせて168人が集まった。

区内2地域からの活動報告があり、まず今宮地域からは「西成つながり名簿」（要援護者名簿）登録者に対して、地域行事のチラシに飲食等の引換券を付けて配布する取組みを報告。これは従来、地域活動への関わりが少なかった方々が参加しやすくなるよう地域で考えた工夫で、チラシの配布は町会役員や民生委員がおこない、配布時に声かけをすることで安否確認に



多くの区民の方が地域の活動報告に関心を持っていた

も活用できていると報告した。

次に松之宮地域からは、住民同士の関係が希薄になってきていることから、自分の町会の情報を共有することを目的にワークショップをおこなったことを報告。引きこもりがちな高齢者

2地域の活動報告の後、元大阪体育大学教授の大谷悟さんから「我が事・丸ごと」地域共生社会の考え方であらわれる地域のあり方について、相手の生活に入り込む最初の一言の重要性や可視化しにくい大切なことの共有が大事であると締めくくった。

見守り相談室管理者の山田直宏さんは、「西成つながり名簿」を活かして、地域のみなさんと一緒に、さらなる見守り活動の推進について共に考えていきたい」と語った。

加さんは「このイベントは昨年に引き続き2回目。8月に実行委員会を結成し、テーマを『ゆうあいでつながり、支え合うまちづくりへ』に設定した。今年は全部署に呼びかけて、みんなで知恵やアイデアを出しながら取り組めた。今後も人と人のつながりを大切にしながら、このような取組みを通して、ささえあえる地域づくりにつながれば」と思いを語った。



互いに理解を深めた

聴導犬

見守りネット倶楽部シンポジウム

～支えられ上手、支え上手な人があふれる～

西淀川区を目指して～

助け上手・助けられ上手で

「地域共生社会」を実現

11月18日、西淀川区役所5階



左から松原さん(区社協)、岩見さん(大野百島地域)、押川さん(佃地域)、玉置さん(出来島地域)

で、支援が必要な人を住民が日常的に見守る仕組みづくりに向けた「見守りネット倶楽部」シンポジウムがおこなわれた。当日は、民生委員や町会役員、見守りサポーターらが多数参加し、各地域の見守り活動者の実践報告を興味深く聞き入っていた。

第1部では「地域がつながる見守り活動のすすめ方」をテーマに大阪教育大学の新崎国広教授の講演があった。

孤立死・ひきこもり・児童虐待・いじめ・不登校などの背景にある「社会的孤立」を防ぐために「地域共生社会」を実現しなければならぬ。

「縦割り」や「支え手・受け手」の関係を超えて、それぞれの立場が「我が事」ととらえ「丸ごと」つながり、一人ひとりの幸せと、地域を創っていく必要がある。

「見守り活動は、柔軟性、発見力などの強みを持ち、問題解決の大きな力になる」と呼びかけ、会場の活動者の方々を励ますとともに「お節介さん(節度のあるなかだち)」をどれだけ増やせるか」

とつなぎ役となっている活動者の方々へポイントを示唆した。

地域にあつたやりかたで「お節介さん」を増やしていく

続いて、3地域から三者三様の見守り活動が報告された。

大野百島地域活動協議会では、3カ月ごとの見守り訪問ほか、皆が顔を合わせる月3回の高齢者食事サービスの会食会に力を入れている。「喜んでもらえることがうれしい。自ら楽しむことが大切」と会長の岩見捷恵さん。「役割が人を元気にすること」を身をもって示された。

佃連合振興町会は、川に挟ま

れた中洲にあり、20町会、14,000人が住んでいる。「災害時ひとりも見逃さない」が合言葉。日頃のつながりが大切」と副会長の押川勝雄さん。月1回、高齢者サポーターが3人1組で「お節介通信」(毎月発行)を持参し各戸訪問。マンション自治会と合同で防災組織を立ち上げた事例も報告された。

2019年 発達講座

支援の原点と意味 了解的アプローチ

～自尊心・自己肯定感に焦点をあてて～

行動の背景にある思いに寄り添い、周囲の人との関係を調整していく「意味了解的アプローチ」。「アイ・サポート研究所」(水仙福祉会内)が主催で、12月21日、たかつガーデンで

「2019年 発達講座」を開催し、市社協、大阪市障害児・者連絡協議会などが後援した。第12回目の今回は「支援の原点と意味 了解的アプローチ」で自尊心・自己肯定感に焦点をあて

て、」がテーマ。福祉関係者や教師、社協職員等約300人が参加した。

今回のシンポジウムを企画した西淀川区社協・見守り相談室管理者の松原有告さんは「要援護者の生活の変化に早期で気づくことができることは、地域住民の強み。地域の人たちが主体となり、地域の特性に合わせ、担い手が変わっても継続できる仕組みにつながるように活動をサポートしていきたい」と思いを語った。

午前の講演「支援の原点をもとめて」では、京都大学の鯨岡峻名誉教授が、心理学の立場から「発達の『遅れ』を取り戻すための働きかけは、その願いとは裏腹にこどもの心に負荷をかけ、こどもが自分らしく生きようとするときの障がいになる恐れがある。こどもは、周囲との



新崎先生の講演は、わかりやすく心に残る

出来島地域では、地域福祉活動支援コーディネーターの玉置明美さんが「平成23年より、毎月見守り活動をしている第五振興町会の活動をモデルに昨年より全町会へ展開した。見守りサポーター80名を地域住民の中から選出。町会ごとにルールを決め、地域全体の見守り活動を振り返るため3カ月ごとの見守りリーダー会議を実施している」と報告した。

関係性、その時間の経過のなかで『育てられ育つ』もの。周囲が本人を『あるがまま』に受け止めることができれば、本人は自力で『あるがまま』を超えていける」と語った。

続いて2つの実践報告がおこなわれた。水仙福祉会の「姫島こども園」（児童発達支援センター）では、心に焦点を当てた豊富な支援のエピソードを紹介しながら、多動、攻撃行動などが顕著な4歳男児が、自己表現できるよう成長していく様子を報告。子育てに自信をなくしていた母親も、理解者との人間関係のなかで、安定した子育てができるようになる。結果、気持ちの通じる親子関係が築かれていった。

「ワークセンター豊新」（生活介護事業所）では、重度知的障がい者に対する20歳から46歳



内容の濃い講演や報告を熱心に聞く参加者



京都大学
鯨岡峻名誉教授

武庫川女子大学
松端克文教授

まで長期に渡る支援について、本人と支援者の変化、関係性の変化を丁寧に追って報告。さまざまな葛藤や職員交代があるなか、行動障がいや「いかに抑えるか」ではなく「本人の立場に立って理解しよう」という姿勢を貫くことで、本人は心を開き、困りごとを自分なりのやり方で伝えられるようになった。最後に、武庫川女子大学の松端克文教授が「福祉の観点から見た意味的アプローチ」と題し、「行動障がいは、周囲の人との関係性の中で作られるもの。本人の生きづらさを本人の側から読み解き、いまを輝いて生きていけるように支援することが求められる。そのためには、『生きづらさ』をわかちあえる他者の存在が不可欠。『生きづらさ』を生み出す社会のしくみを変えていかなければならない」と締めくくり、参加者は最後まで熱心に聞き入っていた。

現在、乳児院や児童養護施設の入所児童の大半が実親をもつ。しかしながら全ての子どもが実親との面会や外泊ができるわけではない。なかなか実親と接することが難しい子どもたちに「週末里親」宅での家庭生活を提供しようとする動きがある^{注)}。地域社会とのつながりのなかで子どもが育つことの意味は大きい。

2020年4月から「都道府県社会的養育推進計画」が実施される。2016年の改

体として捉え、子どもの最善の利益を追求することであり、切れ目なく子どもの育ちを保障すること、そして「家庭養育優先原則」が基盤となる。具体的には、①都道府県における社会的養育の体制整備の基本的考え方及び全体像、②当事者である子どもの権利擁護の取組み、③市区町村の子ども家庭支援体制の構築等に向けた都道府県の取組み、④各年度における代替養育を必要とする子ども数の見込

家庭養育優先という原則

—まずは「週末里親」からという糸口

大阪市立大学大学院生活科学研究科 特任准教授 中島 尚美

正児童福祉法を受けてまとめられた「新たな社会的養育ビジョン」が始動する。そこでの理念は、子どもを権利の主

み、⑤里親等への委託の推進に向けた取組み、⑥パーマネンシー保障としての特別養子縁組等の推進のための支援体制の構築に向けた取組み、⑦施設の小規模かつ地域分散化、高機能化及び多機能化・機能転換に向けた取組み、⑧一時保護改革に向けた取組み、⑨社会的養育自立支援の推進に向けた取組み、⑩児童相談所の強化等に向けた取組み、等が数値目標とともに明記される²⁾。

風をよむ

今後進められる取組みのなかで見落としてはならない視点は、数値目標に子どもが振り回されないこと、個々の子どもの選択権を保障すること、さらに、「ひとり一人の子どもを社会で育むために、自分には何ができるのか」という問いを、全ての人が身近なこととして捉え、試みようとするところである。まずは「週末里親」や「季節里親」として身近に子どもと向き合い、当たり前の

天宗東住吉園を運営している社会福祉法人天宗社会福祉事業会は、昭和35年、社会のニーズに応え、平野区にある志紀長吉神社の境内に保育園を開設したことから、その歩みがはじまります。その後も各地に保育園を新設し、昭和50年には天宗東住吉園を開設しました。現在では6つの保育園と2つの介護施設を運営しています。

天宗東住吉園では、こどもの心に寄り添いながら一人ひとりを大切に思い、安定した保育の提供と子育ての支援を心掛け、地域に愛される保育園をめざすことを保育理念に掲げています。スタッフには「園全✓

まとめた手書きの便りを配布しています。また、区内の保育園や公園にスタッフが出向き、地域の親子とのふれあいなどの活動をしています。

当保育園では地域とのつながりも大切に、さまざまな取り組みをおこなっています。その一つとして、年2回、園児たちがグループホームを訪問し、高齢者の方々と交流を図っています。また、グループホー



こんなこと
やっています！

私たちの施設から

29

社会福祉法人 天宗社会福祉事業会

天宗東住吉園

子育て支援に力を入れ、地域に愛される保育園に

「体は一つの家族」という考え方が浸透しており、いつも笑顔で子どもたちに接し、家庭に近いあたたかな雰囲気づくりに努めています。

地域に愛される保育園づくりの一環として、東住吉地域子育て支援センター「ばけっと」を園内に設置しています。室内には手作りおもちゃ、おままごとコーナーなどがあり、スタッフによる手遊びや絵本の読み聞かせなどもおこなっています。センターには多くの相談が寄せられますが、保護者の方の考えをじっくり聞いた上でアドバイスするように心がけています。周知活動にも力を入れ、毎月のイベント情報などを

ムの方々と運動会に招き、園児たちの元気な姿をご覧ください機会も設けています。

そのほか、矢田北小学校で開催される「矢田北まつり」に参加し、小学生との交流や遊びを楽しんだり、地域の中学校での運動会や文化祭に招待を受け、中学生のたくましい姿に感動し、将来の夢を育んでいます。

当保育園は45年の歴史があり、卒園児の合計は約2,500人にもなります。今後も支えてくださる方々への感謝を忘れることなく、地域に愛される保育園をめざしたいと考えています。

住所 〒546-0022 大阪市東住吉住道矢田2-12-21
TEL 06-6797-0700 FAX 06-6797-0753
HP <http://www.tenso-higashisumiyoshi.ed.jp/>

善意銀行

令和元年9月15日～令和2年1月15日の預託・払出は次のとおりです

預託
払出

- <金銭> スマイルチルドレンから705,871円
- <物品> 株式会社ケーエスケから車いす20台 ▶ 第一生命労働組合大阪南支部から車いす2台 ▶ 生活協同組合おおさかパルコプからおからパウダー368ケース ▶ 岡本株式会社から靴下3,500足 ▶ 株式会社セブン・イレブン・ジャパンから食品・生活用品等662箱
- <金銭> 四恩学園へ30万円
- <物品> 大阪市老人福祉施設連盟加盟20施設へ車いす20台 ▶ 住吉区社協へ車いす1台 ▶ 東住吉区社協へ車いす1台 ▶ 大阪市保育連合会・市内社会福祉施設27施設へおからパウダー368ケース ▶ 市社協・23区社協・施設協加盟8施設へ食品・生活用品等662箱

立ちどまらない保険。

MS&AD 三井住友海上

三井住友海上の安心



クルマの保険 火災の保険 地震の保険

www.ms-ins.com

令和2年度(2020年度)赤い羽根共同募金記念バッジデザインを近畿6府県共同募金会(滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山)が合同募集

10月1日から実施する令和2年度赤い羽根共同募金運動期間中に協力いただいた方へのお礼として、また共同募金をPRするためなどに用いられるピンバッジのデザインを募集します。

◎デザインのきまり

- 赤い羽根共同募金のイメージに合った作品であること
 - 「赤い羽根」と「西暦」もしくは「和暦」が入っていること
 - 使用する色は「赤い羽根」の赤色を含め、概ね3色(グラデーション不可)
 - ピンバッジの実寸(たて・よこ約25mm)でも分かりやすいデザインであること
 - 未発表のオリジナル作品で、他者の知的所有権を侵害しないもの
- 応募締切日=令和2年4月15日(水)(必着)
応募資格=近畿6府県(滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山)に在住、または在勤・在学の方

令和2年度公益財団法人中央競馬馬主社会福祉財団助成金の申請受付のお知らせ

大阪府共同募金会では、一般社団法人京都馬主協会を通じて行う標記財団の助成金に係る申請を受付けます。

受付期間=令和2年3月2日(月)～3月31日(火)(必着)

助成対象=民間社会福祉施設整備費

一定条件が必要ですので、詳しくは、大阪府共同募金会ホームページ <http://www.akaihane-osaka.or.jp> をご覧ください。

問合せ=大阪府共同募金会事務局まで ☎06-6762-8717

共通

赤い羽根おおさか 検索